仁淀川地域観光ビジョン

2005-2009

高知県商工労働部観光振興課

目 次

1　はじめに　～仁淀川地域のお得意さんづくりに向けて～ ・・・・・・1

2　仁淀川地域の観光、3つの特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・2

3　仁淀川地域の観光ビジョン　5つのステップ ・・・6

1 はじめに

～仁淀川地域のお得意さんづくりに向けて～

これまで、私たちが暮らすこの仁淀川地域は「観光地」として高い注目を受けるようなこともなく、観光開発とも無縁の地域でした。

その結果なのでしょうか？　豊かな自然環境と人々の暮らしとが融和した美しい風景、和紙や神楽など古き良き伝統がこの地域には今も残され、数はそう多くはないものの仁淀川や吉野川に惚れ込んで毎年のように遊びにやってくる人、そのゆったりとした時間に身を沈めにくる人が後を絶ちません。

折しも、「観光」は観光スポットを団体で見て回る「マス・ツーリズム」から、個人や少人数のグループで地域の暮らしや産業を体験・学習するグリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムに代表される「サスティナブル・ツーリズム」の時代へと移行しています。

「マス・ツーリズム」が主流の時代には、本地域は観光地的には苦しい経営を強いられてきました。しかし、これからの「サスティナブル・ツーリズム」時代においては、都市圏に隣接し交通至便な本地域は県内でも大きな可能性を持った地域のひとつになります。

様々な人々、産業、文化が山あいに、そして川沿い・海沿いに息づくこの地域は、日常の喧噪から離れ、のんびりとした時間やふれあいを提供することのできる絶好のステージとなる可能性を秘めているのです。

この「観光ビジョン」は、平成16年夏から冬にかけて地域住民が集まって開催した委員会で議論した成果をまとめたもので、平成17年から向こう5年間の指針を示しています。このビジョンをもとに、ひとりでも多くのお客さんに「仁淀川地域にあそびにきて良かった、またこよう！」と思っていただけるような地域づくりを進め、地域に新しい元気を生み出すことができたら、と考えています。

2 仁淀川地域の観光、3つの特徴

特徴その1.仁淀川地域には意外と多くの観光資源がある!

仁淀川地域の「お得意さん」をふやす

仁淀川地域には、よく「なにもない」といわれます。確かに、桂浜のような高知に来れば誰もが立ち寄るような観光スポットはありませんし、高い知名度を持った観光スポットもほとんどみられません。

しかし、いざ訪れてみると「お得意さん」になる人が多いのも特徴です。狭いエリアに様々な観光スポットが分布し、多様な年代層・客層に対応することが可能であること、本格的な観光開発から逃れたこともあって俗化されておらず、他では失われた「人と人」とのふれあいがある･･･といったことなどがその原因として考えられます。

「なにもない」のではないのです。いままでの価値観であれば「ない」に等しかったのかも知れませんが、いまの価値観では、訪れた人がお得意さんになるくらいの魅力を秘めた「いろいろな可能性がある」のです。

本地域の観光スポットの類型

本地域の観光スポットは、**①周遊型**と**②体験型**の2つに分類できます。また、体験型についてはさらに**自然体験**、**生活文化体験**、**地域維持活動体験**にわけることができます。

①周遊型観光スポット

こんな観光スタイル　景勝地や温泉等の施設を周遊するもので、古くからの観光地はこれに含まれることが多いようです。

現況は?　施設の老朽化や交通環境の変化、観光スタイルの変化がすすみ、苦しい状況にあります。

年代層　あらゆる世代が楽しむことができる。

これから　美しい場所や歴史ある場所は人々の心を癒します。これからは、単に「みられる」だけの観光地から、なにかしらの「体験」を組み合わせたりするなど新しい癒しの在り方を提案していくことが考えられます。

②-1　体験型観光スポット（自然体験）

こんな観光スタイル　キャンプやカヌーといったアウトドアレジャーを通して地域の自然を楽しむもので、仁淀川地域の観光の柱です。

現況は?　買物や飲食といった「お金を落とす」ことを目的としていないため、地域への経済波及効果は現れにくいようです。

年代層　基本的には若～中年層向けだが、やや特殊性が強いものと思われます。

これから　現在はキャンプをしたい人はキャンプだけ、カヌーをしたい人はカヌーだけをして帰っていくということが多いのですが、地域内では他にも様々な「面白いこと」ができるんだよということをアピールし、カヌーとホエールウォッチングなど、新たな組み合わせによる自然の楽しみ方を提案していくことが考えられます。

②-2　体験型観光スポット（生活文化体験）

こんな観光スタイル　農業体験や炭焼き、紙漉き、地域の伝承聞き語りなど、地域の暮らしや文化をそのままお客さんに体験していただくもので、本地域でも増加傾向にあります。

現況は?　ほとんどは地元住民の方々による取組みであることもあって小規模なものが多いのですが、季節を問わずさまざまな体験プログラムを用意できること、またなにより住

仁淀川地域の主要な観光スポット

民の方と直接ふれあうことの楽しさを提供できることが特徴となっています。

年代層 かつては中年層以上向けの側面が強かったのですが、最近は女性雑誌などで頻繁に特集が組まれるようになったこともあり、若い女性の参加率が高まってきています。

これから 現在は個々のスポットがそれぞれ情報発信や集客に取り組んでいる状況であり、どこでいつどのようなことをやっているのかはわかりにくいのが実情です。今後は、こうした情報をとりまとめ、案内窓口の整備、それぞれのプログラムの充実や連携を図っていくことが考えられます。

②-3　体験型観光スポット（地域維持活動体験）

こんな観光スタイル 山林保全のための植林や間伐、下刈りなど地域の環境や産業活動の維持継続のために必要な活動の一部を体験型メニューとしたものです。受入側にとっては生活や文化の維持、地域の活力づくりにつながり、参加する側にとっては地域の自然や文化をより強く深く体験できるなど、一般的なグリーン・ツーリズムにはない効果があります。

現況は? 本地域でも過去何度かこの手のイベントが行われていますが、継続性がなく一般化はしていません。なお、地域内では伝統的行事や伝統的産業に地域外の若い人が「助っ人」として関わる事例もみられるようになってきています。

年代層 一般的な間伐や下刈りは観光プログラムとするにはどのような世代を対象にするとしても厳しい面があります、苗木トラストや植林祭、低地での間伐体験などは取り組みやすいといえます。

これから 山林や農村、環境への関心の高まりにあわせて参加者の拡大を図ることが可能になりつつあります。今後は受入れ体制の整備、参加のしやすいプログラムの開発（緩斜面での作業への限定や、作業後に地域の産物がもりだくさんの鍋を囲む会を設けたり農家民宿などとセットにしたりするなど）を進めていく必要があります。

特徴その2.都市部のすぐ近くにある！

都市部の隣にあり、交通も便利な仁淀川地域

本地域は観光客の誘致を図る上で必須ともいえる交通条件に優れた地域です。高速道や幹線国道の改良はほぼ完了しており、高知市や東予地域などの人口集積地から車で60分以内の日帰り圏内にほぼ納まります。

また、飛行機を使えば東京や大阪から2-3時間圏内となり、これらの地域からみれば高知や東予などの都市圏と一体的に周遊することのできる魅力的な観光エリアとなる可能性があります。

都市部に「隣接」しながら豊かな自然を基軸とした様々な観光スタイルが実現できるということ。これは、本地域がもつ大きな強みのひとつといえるでしょう。

宿泊容量の小ささは都市部でカバーできる

交通が便利すぎる観光地は「宿泊」が省略されるために地域に落ちる経済効果も縮小するというデメリットがあります。愛媛県内子町が毎年数十万人という観光客を招き入れながら、宿泊客は道後温泉に流れてしまうという課題に直面しているのがそのいい例といえるでしょう。

しかし、仁淀川地域の場合はそもそもの宿泊容量が2,500人と小さく、これを隣接する都市部の宿泊施設でカバーしてもらうことができるというメリットに読み替えることができます。本地域に高知市の宿泊容量を加算すれば全体で20,000人近くになり、修学旅行などの大口ツアーを複数でも受け入れることも可能になります。日中は地域内でカヌーや手漉き和紙にチャレンジしてもらい、夜は高知市と地域内で分泊してもらうなどのツアーコースも考えられるわけです。

表　地域別にみた宿泊施設容量

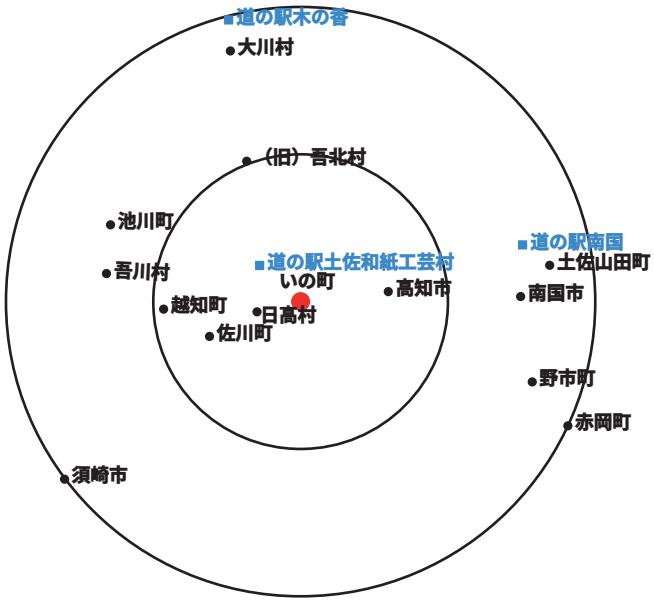
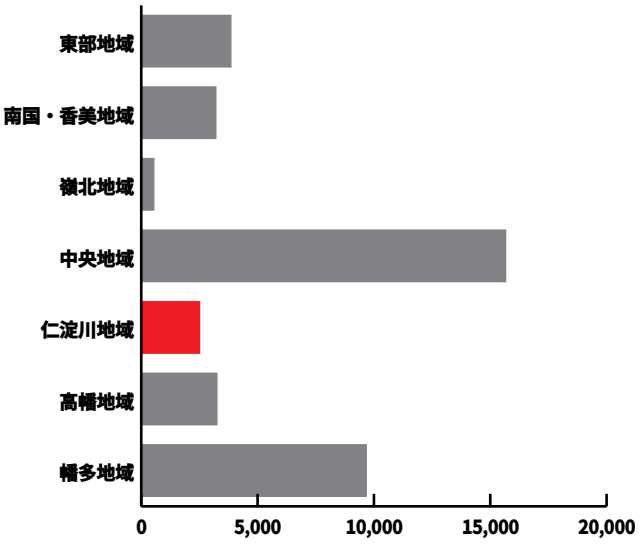


表　地域別にみた宿泊施設容量



宿泊施設は、質を高めるチャンス

こうした考え方は地域内の既存の宿泊施設にとっては脅威にもなるでしょう。しかし、仁淀川地域全体への観光客数が上向くことによる相乗的な効果が期待でき、これまでにない客層をつかむことにつながるかも知れません。

これまで以上に「競争」を意識し、「やっぱりこの宿に泊まらなきゃ」と思わせるようなサービスの向上（料理のおいしさ、施設のきれいさはもちろん、連携又は提供する体験プログラムなどのオプションメニューの充実も含む。）を通してリピーター確保に努めることも必要になるでしょう。

近年、内子町では町の支援のもと古民家を再生した農家民泊の宿が相次いで生まれ、いずれもがいつ予約しようとしても満員というような状況になっています。これは、そこにしかないサービス、そこでしかできない体験を提供していくことできちんとリピーターがついてくる、ということの証といえます。

特徴その3.情報がない！

観光情報過疎の仁淀川地域

どのような地域に旅に行くのでも、事前の情報収集は欠かせません。インターネットや旅の雑誌、地域のガイドブックなどを用いて、自分の必要とすることをその地域で体験することができるかどうかを知ろうとするわけです。

しかし、仁淀川地域をいざ観光しよう！　と思っても、本地域の観光についての情報（観光スポットの詳細や宿泊情報、交通情報、モデルルート、案内人の問い合わせ先など）が満載というようなホームページは見あたらず、各市町村が意趣をこらしてつくったパンフレットも役場から取り寄せたり、地域内の道の駅までこなければ手に入れることもできません。

また、地域の観光に関する横断的な窓口機関もないため、効率的なルートの組み立て方や各スポットへの手配もいちいち個人でやらなければならないなど面倒な部分が多い状況にあります。

こんなことでは、旅行に行く前に疲れてしまいます。

観光スポットが「点」で終わっている

この「情報過疎」の問題とつながっていると思われるのが、それぞれの観光スポット間のつながりの弱さです。つながりが弱いために観光スポットから他のスポットへのお客さんの斡旋もあまり行われず、お客さんはそれぞれのスポットを点としてまわるだけで、それを線とし面とし･･･といった広がりを持つことができません。なにより、実際には多くのお客さんが他の地域へとそのまま行ってしまっているのが実情でしょう。

観光による経済効果は、観光スポットから観光スポットへ「渡り歩いて」もらわなければ効果があがりません。現状では、せっかく地域にお客さんが来てくださっても、お客さんは地域全体の観光に関する情報を得られない状況、つまり単体の観光スポットの情報しか得られていない状況にあるわけですから、どうしても線的に地域を楽しむのではなく点的に楽しむようになってしまいます。そして、それぞれのスポット間同士のネットワークも薄い状況にあるため、お客さんが地域内を行き交うということもありません。

いまの状況は「もったいない」以外の何物でもありません。もっとお客さんの立場にたった情報発信の在り方を模索するとともに、観光スポット、地域住民、行政、NPOなどが地域の観光振興を図る上で必要な横のつながりづくりに取り組んでいかなければなりません。

3 仁淀川地域の観光ビジョン 5つのステップ

仁淀川地域にきて良かった！と思ってもらえるように

これからは、まだまだ少ない「お得意さん」をひとりでも増やし、またいつまでも「お得意さん」であってもらうために、以下の取組みを進めていくことが必要です。

はるばるやってきてくれたお客さん一人ひとりが「仁淀川地域にきて良かった!」と思い、他の地域では体験できないような楽しい思い出、濃い思い出をおみやげに帰ってもらえるように、あらゆる観光スポットを育て、つなぎ、知らせる術を考えていかなければいけません。そして、そのためにも地域の大きな弱みとなっている人づくり・つながりづくりに重点をおいた「横の連携」を深めていくことが何よりも大切なことになってきます。

次章では、具体的にこれから仁淀川地域でどのような取り組みをしていけば良いのか、基本的な方向性を示していきます。

1年目
2年目
3年目
4年目
5年目

step1 ひとづくり
step2 知らせる
step3 みがく
step4 ためす
step5 つなげる

Step1

ひとづくり>>>受入れ体制を整えるために

○仁淀川地域観光フォーラム（仮称）を立ち上げます

仁淀川地域は、観光にかかわる人々の横のつながりが非常に弱い地域です。このつながりがもう少しあれば、今までなら実現することができなかった観光ルートの開拓や観光スポットの開発ができるのではないでしょうか。

そこで、地域内の観光関連の従事者、住民、行政、NPO、専門家といった観光の担い手のネットワークづくりを図るため、観光ビジョン策定委員会のメンバーが発起人となって「仁淀川地域観光フォーラム（仮称）」を立ち上げます。

参加資格はなし。仁淀川地域の観光を盛り上げたいという人なら誰でもOKです。

知る　地域内の観光スポット調査

地域内の観光スポットを実際に訪ね、地域内にどのような観光スポットがあるのか、また休憩施設やトイレなどがどのような状況にあるのかを調べ、これからのあるべき姿をみんなで考えます。その成果をたとえば地図のようなものに落としていってもよいでしょう。

遊ぶ　農泊の体験・実験

地域内の空家や空校舎、公民館を活用した農泊を試験的に実施したり、実際に小規模なモニターツアーを企画したり、フォーラムでは「思いついた」ことを出来る限り楽しみながら実践し、仁淀川地域での観光の在り方を模索していきます。

テーマは・・・知る・遊ぶ・語る・創る

語る　観光関連の取組み発表会

参加者本人が一日講師となり、参加者が係わる観光関連の取組みについて発表し、その特長や課題を共有します。また、「観光カリスマ」による講義などを行うことも考えられます。また、こうした会以外にも積極的に語り合う場を設けていきます。

創る　観光コミュニティビジネスプランの検討

知る・遊ぶ・語るの一連の流れを通して把握した観光関連の活動について、コミュニティビジネスの考えにたったビジネスプランとして練り直し、次のステップへとつなげていきます。

以下すべてのステップをフォーラムが中心になって取り組んでいきます。

Step2

知らせる>>>より多くのお客さんに来てもらうために

積極的な情報発信に努めます

観光の少人数化が進めば進むほど、地域の情報をいかにして「お客さんに伝えていくか」ということが重要になります。観光の事前情報収集や予約もネット上で多く済まされるようになってきている現在、携帯電話にも対応した仁淀川地域観光の総合的なホームページの立ち上げと、これにリンクした分かりやすいガイドブックの整備が急務となっています。

○ホームページとガイドブックの整備

ホームページ>>>体験内容別・地域別・季節別に体験プログラムを検索できるものとし、見た人が事前に地域のことを学習できるようにする。携帯電話からのアクセスも当然考慮する。川遊びのルールブック的な要素も入れたい

ガイドブック>>>サイトとリンクして利用することが可能なものとする。たとえば、ガイドブックをみて最新情報を手に入れたいと思ったら、QRコードを読み込んで最新情報の掲載されたページへアクセスできるようにするなど・・・

○ホームページやガイドブックとリンクした現地案内のしくみづくり

トイレを案内所に>>>公衆便所を改修し、案内図やパンフレットを設置して小さな「道の駅」としての機能をもたせていくことを検討します

サインの整理>>>既設サインを活用しながら、サイン網の再整理を行う（ホームページやガイドブックとの統一性）ことを検討します

都市部での案内所>>>高知市などに出張案内所を設置することを検討します

実施主体
観光フォーラムやNPOが実施。行政には情報提供等で積極的な支援を期待。年数を重ねるごとに充実

Step3

みがく>>>観光地域としての磨きをかけるために

観光スポットの魅力UP

仁淀川地域の多くの観光スポットの魅力をより強く引き出すための方策を検討し、そのなかで行政とも共同して「できること」から実践を図っていきます。

○観光スポットの魅力UP

周遊型スポット>>>景観づくりとあわせて体験型のプログラムを新たに付加することを検討

体験型スポット>>>体験内容の充実や新しいスポットづくりに向けたアイデアだしと実践。各観光スポット間の連携が図りやすい時間設定

宿泊施設の魅力づくり>>>「日帰り」を意識した独自のプログラムづくりの検討、「日帰り」では体験できない夜型の体験メニュー開発など、**「選択」の楽しみ**づくり

○ 山・川・海の拠点づくり

美しい風景づくり>>>源流域の森、沈下橋、棚田などの美しい景観の保全にむけた方策検討

カヌーの拠点>>>越知・いの・春野などで整備

棚田>>>棚田地で都市住民を対象とした体験型プログラムづくりや農泊を実施

地場食材>>>道の駅などでの地場食材の活用

遊休農地の活用>>>花の定植、市民農園など

政策統一>>>仁淀川関連の環境・観光に関連する政策の統一にむけた働きかけ

神楽>>>伝統芸能イベントの実施

○新しい体験型プログラムとルートの検討

ツアー開発>>>生活文化体験型プログラムと周遊型を組み合わせた女性層をターゲットとしたツアーや、森づくり体験、川漁師体験、歴史体験、神楽体験、こどもカヌー教室などのツアーコースの開発

実施主体
観光フォーラム、各種団体や観光関係者

Step4

ためす>>>具体的な問題点を把握するために

修学旅行の受け入れ

近年、中学・高校の修学旅行は貸し切りバスで観光地を巡るだけの周遊型から、地域の自然・文化体験型を取り入れた形へと移行しつつあります。

本地域ではこれまで修学旅行生の本格的な受入は行ってきませんでしたが、宿泊施設の稼働率向上と「未来の常連客」づくりを図るため、交通の利便性や提供できるメニューの豊富さを積極的にPRしながら修学旅行の誘致に努めていきます。

○仁淀川 山・川・海まるごと体験修学旅行

モニタリング調査>>>修学旅行向けのプログラム整理、コース設定、モニタリング調査を実施。高知市や幡多地域の観光スポットとも連携し、より訴求力のあるものとするコースを検討

積極的な営業>>>（財）高知県観光コンベンション協会などと共同し、関東・関西・九州などの教育関係機関、旅行代理店への営業活動を実施。数年間の習熟期間を経て修学旅行の定着化をめざしていきます

実施主体
観光フォーラムが中心となり、（財）高知県観光コンベンション協会、旅行会社と共同して実施

Step5

つなげる>>>いつまでもお客さんに来てもらうために

5年間の取組みの先に

ここまであげてきた様々な取組みが、果たしてこのビジョンに定める5年のうちにどれだけ達成できているかどうかは分かりません。しかし、ここまで挙げてきた取組みが一つひとつ順を追って実現されていくことで、これまで「もったいない」ことばかりだった仁淀川地域の観光は少しずつ元気になっていきます。

6年目からは、ここまで挙げてきた取組みがどれほど達成され、またどれほどの成果をあげたかの検証を行いながら、引き続きとどまることなく仁淀川地域の観光を推進していくことが必要です。

○観光フォーラムの6年目からの役割

県内観光地とのネットワークづくり>>>県内の他の観光地域との連携を深め、より多くのお客様に「高知」を感じてもらいたいものです

観光のコーディネート役>>>（財）高知県観光コンベンション協会や行政とも連携して旅程計画や宿泊調整といったコーディネート業務を行う（NPO等への委任も検討）

○ 計画的な土地利用の誘導

観光のための土地利用計画づくり>>>保全／利用ゾーンなどの土地利用ゾーニングを行い、地域や環境とのバランスが取れた開発を誘導します

高知県観光ビジョン策定委員会（仁淀川地域）
委員名簿

議 長	伊藤　昌人	池川町
委 員	岡林　弘	いの町（本川村）
委 員	川村　滋昭	いの町（吾北村）
委 員	三浦　博史	いの町
委 員	中嶋　健造	いの町
委 員	矢野　忠茂	日高村
委 員	矢野　靖	日高村
委 員	岡村　治	春野町
委 員	山崎　幸男	土佐市
委 員	矢野　泰幸	土佐市
委 員	三好　学	池川町
委 員	三浦　栄子	池川町
委 員	井上　秀彦	吾川村
委 員	中島　道雄	仁淀村
委 員	田村　早智	佐川町
委 員	山地　亮孝	越知町
委 員	黒原　保	越知町

高知県	小松仁視
高知県	坂田省吾
（株）相愛	川崎高思
（株）相愛	竹村直也